
一般人の、血塗れな過去

宛宮志貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一般人の、血塗れな過去

【Nコード】

N8616Z

【作者名】

宛宮志貴

【あらすじ】

死ねる人間にも、死なせる人間にもなれない一般人の過去の話。彼の好きだった場所は、今はもうない。

ただの死体置き場と化したあの部屋は、もうない。

あるのは、殺されるのまかなわなかった自分と、血塗れな過去だけ。それでも死ねないから、生きていこう。

そういうお話。

俺の母は、俺の目の前で殺された。

何分幼い頃の話なので記憶は曖昧であるが、大体の事は覚えて
いる。

それは、現在中学生である俺が小学生の頃。

小学……3か4年生の頃だ。

何でもない日常の中、突然母は殺された。

確認する意味でも、思い出してみよう。

俺が学校から帰ると、家のリビングには母と見知らぬ男がいた。
向かい合っている形でテーブルを挟み、それぞれソファに座っ
ていた。

今は二人とも口を開けてもいないが、話をしている事は分かっ
た。

しかし客人相手に珍しく暗い顔をしている母と、二人を包む雰
囲気の重さから会話を楽しんでいるようにはとても思えず、俺は玄
関から覗くりビングの空気に、ひどく戸惑った。

でもまあよく考えてみればここは俺の家だし、俺が遠慮するな
んてのも気分は良くない。まさにばか丸出しの考えではあったが、
俺は結局、普通にその空間へとはいつて行った。ただ、どうして
も慣れない張りつめた空気に緊張してしまって、少し距離を置いて
の「ただいま」になってしまった。

声も自然と不安げなものとなった。

母は苦笑いしながら「おかえり」と言い、案の定、「お部屋に
いっていなさい」と一言。

母の声もあってか俺の姿に気付いた男は、俯きがちだった顔を
あげ、俺を視界に入れた。全体的に暗い雰囲気を纏った男だとす
ぐに感じたが、それ以上に整った顔をしていた事に驚いた。

計算された容姿、だともいうのだろうか。

少なくとも、俳優をしていると言われたら疑えないくらいの容姿であった。

そいつは俺を確かに視界に入れたが、少しすると、すぐに母へと視線を移した。

失礼な奴だな、というより、何だか不思議な人だと思った。

この男にも挨拶はしておくべきだろうかと思わないわけでもなかったが、母の「早く行きなさい」という声に急かされ、俺は挨拶などなしに部屋へと駆けて行った。

部屋には、いつもいるはずの兄と妹がいなかった。

俺の机に置かれた手紙によると、父と買い物に行っているらしい。

兄の丁寧な字で、そう書かれていた。

兄も妹も父もいないとなると、何もすることがない。

俺は仕方なく宿題を机に広げた。

いつもなら兄とゲームでも始めるか、妹のままごとにつき合われるかのどっちかになるのだが、いないのなら仕方がない。

そうしてノートに落書きしつつも宿題を片付け、俺は部屋から出た。

あれから2時間はたっているだろうが、兄たちは未だ帰っていない。

リビングの様子も変わってはいなかった。

退屈だし、近くで遊んでこよう。

俺はそう思い、少しの気まずさに耐え、リビングを通って家を出た。

母も気づいてくれたようだったし、問題は無いだろう。

——そうして近所の友達と遊びまわって、すっかり日も暮れた頃。

つい遊び過ぎてしまったと急ぎながら、俺は家へと戻って行った。

家へ着くなり乱暴に靴を脱ぎ捨て、母に二度目の「ただいま」

を告げる——筈だった。

しかし、俺がリビングで目にした物は、そんな俺の思考をぶっ壊すのには容易すぎる鈍器。

何ということか。

あの男が母の上にまたがり、両手でその細い首を絞めあげていた。

その時感じたのは恐怖か、驚愕か、いったいなんだったのか——喉が熱く乾いていくのを感じながら、俺はただ現状に口を開けて立ちつくすことしかできなかった。

やがて男は、ゆらりと立ち上がる。

そして、最初に見た時には考えられない程愛想のいい笑顔をして、俺を見た。

「ユウ君だね」

名前を呼ばれても返事などするわけがない。俺はぐったりと床に伸びる母だった物を滲ませながら、とにかく自分たちの部屋へと走った。

さすがにもう父達は帰ってきている筈だ。そんな考えのものの行動であつたが——目に飛び込んできたのは、そんな甘えを砕く、惨状。

今日宿題をした、

昨日まで兄とゲームをした、

妹とままごとをしてやった、

父に勉強を教わった、

母によく叱られていた、

そんな部屋は、死体置き場と化していた。

叫びだしそうなのをぐっところえ、部屋を見回す。

兄の死体があつた、

妹の死体があつた、

父の死体があつた。

どれもこれも無惨としか言いようがないほど破壊された、破壊

の限りを尽くしたような物であった。

それなのに区別がつくのは、顔だけ綺麗に残してあるからだ。首も腕も足も指も何もかも滅茶苦茶に切りつけられ、ちぎられ、肉だか骨だか何と呼べばいいのかわからないような、真っ赤な塊になっていた。

それなのに、それなのに、顔だけはしっかりと残っていて。

俺はただ、流れる涙をそのままに、吐き出さないように口を両手で覆った。

ここは俺たちの部屋だ。

汚したくは、無かった。

「……ねえ、ユウくん」

気づくと、あの男が俺の後ろにいた。

恐怖で足が震える。

疑う理由なんて何も無かった。

さっき見た時は気付かなかった、男の全身に付着した血液が、全てを物語っている。

「ユウくんさあ」

男は言う。

「俺が誰から順番に殺したか、わかる？」

何を言っているんだこいつは？ と訊き返すわけにもいかずに、俺はただ首を横に振る。「えっとね、まずお父さんを殺したんだ」

男は、淡々と、笑顔で言う。

「それから、お兄ちゃんを殺した。妹を殺した。何で分かる？」
わかるわけがないしわかりたくもない。

大体こいつは何なんだ、俺に何を言おうとしているんだ？

「君のお母さんを苦しませるためだよ。目の前で最愛の夫と、子供たちを失うんだ。苦しいだろ？ 俺だったら、絶対嫌」

「じ、じゃ……じゃあ、な、んで……」

男相手に出た声は、そんな弱々しいかすれた声だった。

男は笑った。

「そこまでしたら、君のお母さんは俺を必要としてくれるんじゃないかと思ったんだ。皆々なくしたら、俺だけが必要としてくれるんじゃないかと思ったんだ。でも、駄目だったみたい」

駄目だ。

俺はこの男の話を聞いて、一番にそう思った。

こいつ、まともな思考回路をしていない。いや、人を殺すような奴ならこれでもまだまともかもしれないさ。

でも、そんな奴の気持ちなんて分かりたくないし、わかったらおしまいだし、それは「まとも」の基準だってそうだろう。

「だから、君のお母さんも殺した」

男は俺ではなく部屋を見て言った。

「ユウくんは殺さない」

「……おい、キノ、お前どうしたんだよ」

珍しく静かだな、とヤツカが俺の肩をたたいた。

「少し昔を思い出した」

「昔……？」

「お前で言う、ヒロセの自殺みたいなもんだよ」

俺が言うと、ヤツカは俺から目をそらした。

飛び降りた瞬間の事でも思っていたのかもしれない。

……かわいそうな奴だな、と思う。

自殺で酷い気分になるのは死んだ方じゃなくて、残された方だ。

死ぬ奴はいい、死ねるんだから。

でも残された方は、これからだって生きていかなくてはならぬのだ。

そいつの死の記憶を脳に焼き付けたまま、生きていくのだ。
こんな酷い話があったまるか。

「……………」

きつと。

殺人だって、それと同じなんだ。

殺す方はいいい、殺された方はいいい。
一番つらいのは、残された奴だ。
残された、俺だ。

「……………アサハラ・アイ、ねえ」

「ん？ キノ、今アサハラって…………」

「ああいや関係ない。お前が大好きな看護師さんの事じゃないよ。
別人」

「別に大好きってほどじゃ…………」

「まあいいさまあいさ。帰ろうぜヤツカ、腹減った」

「給食食べたろ」

「でもさあ…………あ、おーいサトリちゃん！ 俺らと一緒に帰らね
ー？」

「おいキノ僕と話を続ける気は無いのか」

「可愛い女の子がいつだって俺の中の一番なんだよ、ヤツカも嫌い
じゃないけど優先順位は2番目だな」

「はいはい」

つらい、けど。

死ねないから、生きていこう。

そう、思う。

（後書き）

後書きは久しぶりな宛宮です。

普段ふざけているような人でも深く付き合っていると、その人の重い過去とか、いろいろ見えてきて、こっちが辛くなってきたりします。

でもそこで「はい友達ごっこ終わり」なんてするのは、最高につまらない事だと思いうのです。

「過去にいろんなことがあったのに、それなのに笑顔を絶やさず、周囲も笑わせ、今をしっかりと生きている人」なんて、とても素敵じゃないですかね。

そう言う人を支えてあげる為に、宛宮の暗さも上手く使いたいものです。

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8616z/>

一般人の、血塗れな過去

2011年12月27日01時52分発行